

224 フランスの中の日本（最終回）-日仏関係の未来（2023年12月28日）

前回、まだ日本とフランスとの間に直接的な交流がなかった17世紀に、両国を結びつけた[鎧兜](#)をご紹介しました。17世紀には[南蛮貿易](#)が行われ、日本の漆器がヨーロッパの王侯貴族に珍重されました。フランスには、金を多用した目を見張る[マリー=アントワネットの漆器コレクション](#)が残されています。日本の磁器もヨーロッパ人を魅了しました。伊万里焼を輸入するだけではなく、パリ郊外にあった[シャンティイ窯](#)では伊万里の柿右衛門様式を真似た柄の皿やカップが作られました。こうした作品が作られるほど、当時のヨーロッパで日本の磁器に対する憧れが強かったことがわかります。人の交流がなかった時代は、工芸品が両国の橋渡し役をしていました。



1858年に日仏修好通商条約が締結され、日本とフランスの本格的な交流が始まりました。そして、19世紀後半には、ジャポニズムブームが起こりました。その立役者と言えるのが、[美術商の林忠正](#)です。浮世絵が、モネや[ゴッホ](#)、[マネ](#)、[トゥールーズ・ロートレック](#)、[アンリ・リヴィエール](#)といった画家に影響を与えました。今でも人気の高い葛飾北斎による絵手本帳の[北斎漫画](#)は、アールヌーボーを代表するエミール・ガレの作品やフランソワ=ウジェーヌ・ルソーによる[セルビス・ルソー](#)に取り入れられました。さらに、染め物のための[型紙](#)は、アールヌーボー時代に新たなデザインを生み出しました。[1889年のパリ万博](#)では、[盆栽](#)がブームとなりました。この時代は、王侯貴族に限らず、芸術家や裕福な階層の人たちが、日本文化と出会いました。



まだ数は多くありませんでしたが、人の交流も始まりました。近代国家を目指していた明治政府から招聘され、横須賀造船所の建設を指揮した[レオンス・ヴェルニー](#)や日本近代法の父と呼ばれた[ギュスターブ・ボワソナード](#)といったお雇

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

い外国人は、日本に新しい技術や知識をもたらしました。[明治政府から派遣された使節団](#)が、フランスを訪れたこともありました。

近年は、第二のジャポニズムブームと言ってもおかしくないほど、フランスで日本文化が受け入れられています。[日本の漫画](#)や[日本食](#)はもちろんのこと、フランスで伝統文化から現代アートまで幅広い日本文化に触れることができます。これほどまで多種多様な日本文化をフランスで体験できるのは、日本を愛するフランス人とフランスに日本文化を伝えたいと願う日本人が、フランスで日本文化を紹介したおかげです。自治体や民間が企画する日本関連イベントや市民レベルでの交流によって、フランスの地方にも日本文化が広がっています。

市民レベルでの交流と言えば、日仏友好団体が挙げられます。2023年12月現在で、178の団体が日本大使館のリストに登録されています。これらの団体は、フランス各地で日本文化の紹介や日本人とフランス人の交流イベントを開催しています。また、自治体交流も、日仏両国の関係発展に重要な役割を果たしています。現在は55組の自治体が、姉妹都市提携を結んでいます。友好都市や特定の分野のパートナーシップを進める自治体もあります。さらに、自治体だけでなく、シャンティ城と姫路城の[姉妹城提携](#)や[パサージュと商店街](#)の交流もあり、日仏間で様々な交流が行われています。フランス人は、工芸品を通じて日本と出会い、やがて日本人とフランス人の交流が始まり、交流の幅が広がってきました。現在では、コロナ禍で一時中断した人々の交流が、戻ってきています。

この3年間、フランスの中で見つけた数多くの日本文化をご紹介します。文化コラム「フランスの中の日本」は今回が最終回ですが、人々の交流がさらに活発になされ、日仏両国の友好関係がますます発展していくことを願って止みません。

